

『カード展開型』のワークショップ

【1班：光真正夫】

グループの中で提案された多様で具体的なアイデアを(1)災害に強い地域づくり(2)情報の担い手(3)自立と協働(4)支援体制—という4項目の“行動指針”にまとめました。



「災害に強い地域づくり」は災害時のマニュアル作成や高齢者・孤立無援者対策、訓練、学校教育現場での啓蒙活動、今回のような勉強会や被災した人たち・地域との交流会など、最も多い38件の意見が出されました。また「情報の担い手」としては、災害発生時や防災・減災のための情報の収集・発信、連絡網作りを挙げています。「自立と協働」は行政との連携やボランティアサポートセンターとのネットワーク作り、被災者・避難住民の受け入れ体制など。「支援体制」はニーズの把握、メンタル支援などを掲げています。結果として、災害被災地・被災者との交流促進・災害ボランティア推進育成・被災地商品販売支援・情報発信を掲げたネットワークさくらの事業内容に合致するものになりました。グループとしては、この4本柱に沿って、具体的に地に足のついた活動を進めていくことが大切という認識で一致しました。

【2班：藤橋由希子】

私たちのグループでは、さくらの強みを活かした展開や、組織強化について話し合いました。さくらの強みはなんといっても現役プロ集団が多いことで、各自が持つスキルや経験をもっと活動に活かさないかという意見が出されました。



ではどんな活動かということですが、平時と非常時で内容が変わります。平時は防災、減災につながる啓蒙活動。非常時はスピーディーな情報収集と公開、支援する者(団体)を支援する中間支援組織としての立ち位置を理想像とした話が出ました。

ただ、このような活動を続けるためには、組織としてもっと強化すべき点があるように感じています。まず「自分たちの理念である『誰のため、何のため』の中から『誰の』という点を大切にしたい」「これまでの学んだことを整理、体系化して理解する(知識としての蓄積)」「社協をはじめ他の団体や行政とのつながりを維持強化する」「さくらの知名度を上げる」など、組織強化を求める意見が最も多く出ました。

とはいうもののやはり不安はあって「中間支援と言いつつ、結果的に何もできなくなるのではないか」「行政に都合よく使われるのではないか」、それに連携の難しさを指摘する声もあって、「民間団体である特性を生かして、もっとワガママに自分たちのポリシーを貫いた活動をしてほしいのでは」という意見も出ていました。

【3班：佐野馨】

さくらとして出来ることとして、まず「災害発生前」は備えが必要です。具体的には、ボランティアセンター運営に関わる模擬体験(シミュレーション)、人工呼吸や救命機器AED(自動体外式除細動器)の使用方法などを習得することや地元の避難場所を知っておくことなど。またネットワークづくりとして、ご近所に声を掛け合い助け合いにつなげることで、行政とのつながりや他の団体との連携の必要性を指摘する意見が出されました。



次に災害発生時の段階では、情報収集が最も大切になります。避難する際の集合場所や経路のほか、災害時に最も市民生活への影響が大きい電気やガス、水道、交通、通信などのライフラインの確保にとって、情報の収集と発信が欠かせません。さらに、どのような支援が求められているか、ニーズへの対応には優先順位、行動、即応力が必要となります。また電話やメールについても、冷静に判断する力も大切になることでしょう。

以上、今後は東日本大震災の時の対応を教訓に、これから身近に起きるかもしれない私たちが暮らす地域の防災対策に向けても力を発揮していけたらと思います。



ネットワークさくらでは、この日の討議内容や今後取り組むべき課題を理事会でさらに話し合い、来年の活動につなげていくことにしています。



講演会

いわき市からの報告

2014年9月14日/ITビジネスプラザ武蔵

災害ボランティアの役割や必要性を学ぶ

ネットワークさくらの講演会「東日本大震災を乗り越えて 災害ボランティアについて考える」は9月14日、金沢市のITビジネスプラザ武蔵で開かれ、メンバーや市民ら約40人が被災者の心に寄り添うボランティアの必要性を学びました。

最初に、藤弥一司理事長が「東日本大地震から3年半が経ったが、復興はまだ道半ば。皆さんと共に新たな気持ちで支援活動を考えていきたい」とあいさつ。その後、「災害を学び考え、そして行動しよう」をテーマに、被災地の現状や復興支援活動の現状を通じて、災害ボランティアの在り方と災害に備えるための行動について考えてみました。

一番大切なのは「死なないこと」

福島県いわき市で学習塾を営む鈴木貴さんは、デザイナーになるのを夢見る小学4年生の長女を津波で亡くした体験を語りました。



鈴木さんは「もし災害に見舞われてしまった時、一番大切なことは何か。それはまず『死なないこと』。皆さん自身、そして大切な家族を死なせないようにしてほしい。時間がどれだけ経過しても失った命への後悔は消えることはない。災害は必ず、どこかで起き続けると思う。きょうのプログラムのような命を救う、救われた命を支える、その方策を考える空間、場所、支援、学びの機会が今後増えていくこと、そういう機会が絶やさず続いていくことを希望している」と述べました。

FUKUSHIMA

いわき市

いわきの皆様、ありがとうございました！



人を笑顔に！それがボランティア

同じいわき市の社会福祉協議会地域福祉課長の草野淳さんは、震災直後から災害ボランティアの担当として復興支援活動に取り組んできた経験を通じて、被災者の気持ちに寄り添う災害ボランティアの役割を説明しました。その上で草野さんは「支援者は被災者の気持ちを知ることが大切。被災者がなくしたものは、余りにも大きすぎる。支援活動をしたことで『満足』をしてはいけません。笑顔を見るまでは『満足』をしてはいけません。ほんの少し『口元が緩む』でもいい。その人を笑顔にする活動、それが“ボランティア活動”だと思っています」と締めくくりました。



最後にパネル討論会が行われ、鈴木さん、草野さんの二人に、いわき市平中神谷の山に世界一の桜の名所を作ろうと活動しているボランティアプロジェクト「いわき万本桜」応援部の坂本雅彦さん、ネットワークさくらの柳原吉伸副理事長が加わり、災害ボランティアの役割や課題について意見を交わしました。

